



昭和51年(1976年)

11月号(No. 377)

社団法人 日本山岳会

(J. A. C.)

定価一部 150円

## 目次

|                                          |                                                  |
|------------------------------------------|--------------------------------------------------|
| ヘンダーソン夫人と<br>ペニグリッドホテル<br>(村山雅美).....(1) | 明治初期の日本における<br>外国人の登山活動について(2)<br>(水野 勉).....(6) |
| 山を歩く<br>飯豊山(野口末延).....(2)                | 日高幌尻山(小倉 厚).....(2)                              |
| 海外だより<br>小島鳥水氏の足跡を尋ねて<br>(近藤信行).....(2)  |                                                  |
| 図書紹介<br>わが北壁の記.....(4)                   | 山・人・本.....(4)                                    |
| 霧の谷 II.....(5)                           | 会員通信・集会報告.....(5)                                |
| 会務報告・ルーム日誌.....(10)                      | 会員動向など.....(11)                                  |
| カット/谷アノ子                                 |                                                  |

## ヘンダーソン夫人と

## ペニグリッドホテル

村山雅美

J・ヘンダーソン夫人と言え  
ば、知る人ぞ知る、古き良き時代  
のダーズン・シエルパの育ての親  
である。JACにとっても、一九  
五二年のマナスル以来馴染の人も  
多いはずである。その頃、彼女は  
ダーズンで大きな茶園を経営し  
ていたJ・ヘンダーソン氏と二人  
のお嬢さんと共にバンガローに住  
み、ヒマヤンクラブ・ダーズン  
ン支部長として各国ヒマヤン遠征  
隊のシエルパの斡旋を一手に引き  
受け、あわせてシエルパの育成に  
当たっていたのである。

私が初めて、ヘンダーソン夫人  
に会ったのは、一九五三年マナス  
ル隊のシエルパ集めに三田隊長と  
共にダーズンを訪ねた時であっ

た。初めて見るカンチエンジュ  
ンの山なみに圧倒されていた私の  
前に現れた彼女は、我々が畏敬の  
念さえ持っていたアンタルクーを  
従僕の如く使役して、テキパキと  
サードにギャルツエンミツチェ  
ン、コックにパンジーと、数多い  
シエルパを我々の前に面接試験よ  
ろしく引き合わせたことも印象強  
い。

その後、一九五八年頃だろう  
か、ヘンダーソン夫妻はダーズ  
ンの茶園を売り払い、いったんイ  
ギリスで引退生活を送っていた  
が、開拓精神旺盛な夫妻は、ペ  
ルに移り、彼の地に茶園を一時  
営んでいたのである。ヘンダー  
ン氏没後は、南アのナタールでサ

トウキビ園を経営するボンズ氏に  
片付いている下の娘の所とイギリ  
スの間を、一年を半分ぐらいず  
に住みわけている。南極の帰  
り、私は何度か、見渡す限りのサ  
トウキビ畑の農場の住いで会ったも  
のである。

時移り、所を変え、この七月、  
数年ぶりにロンドンにはヒースロー  
空港でヘンダーソン夫人を迎えら  
れ、ロンドンの南西約五〇キロの  
農村に住む彼女の食客となったの  
である。御承知のような、イギリ  
ス農村の曲りくねった狭い道を彼  
女が運転する車はもの凄くスピー  
ドで駆け抜けるばかりか、前にい  
る車は追い越さなければならな  
いと思っているかのように、強引に  
追い越してはかかるのであった。も  
し、モタモタしている車の後につ  
くや、罵詈雑言の上クラクション  
を鳴らし、ドケドケとばかりに先  
に出るのが、もう七十に近いおば  
あさんとは恐れ入った次第だっ

た。イヤまったく元気なものであ  
る。かねて、彼女にライフワーク  
として、「シエルパ物語」を書く  
ように勧めていたが、なかなか進  
行しないので、その督促も要件の  
ひとつであった。書齋には、ヒマ  
ヤン・ジャーナルを初め今や古  
典ともなった各国の遠征隊の記  
録、またタイガーパッジ推せん  
の原稿など資料や写真を取り揃え、  
この通りやっていると俄に  
低姿勢に変ったものである。ここ  
ろが折りから、エンテベ空港事件  
の犠牲者、ブロック夫人のことを  
報ずるテレビを見るや、「アミン  
をやっつける」とウィスキーのグ  
ラスで机を叩く勇ましいおばあさん  
であることを、旧知の皆さんにお  
伝えしておこう。

ヘンダーソン夫人の勧めによ  
り、北ウェルズのスノードン山  
で汽車の旅に出た。スノードン  
は、エベレストのクウムも、此処  
の谷CWMがその名の元であり、  
一〇〇〇メートル級の岩山にはE  
乃至F級のルートも多いイギリス  
の岩登りのメッカとも言わ  
べき所だ。その中心地、ペニグリ  
ッドにクライマーズ・クラブとして、  
十九世紀半ばに生まれたホテルが  
ある。現在はクリス・ブリッグス  
氏の持ちもので、ペニグリッド・  
ホテルの名のもとに、当時の馬車  
の踏み台以外は、昔のまま使っ  
ているという羨しい山のホテルであ  
る。

山をきれいに「川」は持ち帰ろう

ふれる若者に、「この人はマナスルから南極に行ったのだ」と紹介し、天井にサインさせられたのも、面映ゆいペニグリップ・ホテルの思い出であった。

## 山を歩く 飯 豊 山 野 口 末 延

とは聞いていたが、時期がよかったのか満開、群落を成しており特に飯豊山へ登りの草履塚辺、大日岳の路傍に咲く色の違った数多い花は背景となった牛首山の数条の雪渓と共に見ごたえのある飯豊風景であった。それに大小の雪田、雪渓で喉をうるおしたことはたびたび。

故日高信六郎元会長の追悼会に出席した翌夜の七月二十三日上野発の夜行で出発、二十八日夜帰京。同行は会員の松家晋氏で、同君がテント食糧等を持参してくれ、その上小生に合わせて歩いてくれたので計画通り同山塊を南の福島県山都口から入り北へ、地蔵、三国、飯豊山、御西、主峰の大日岳はここから往復、烏帽子、かいらぎ、北俣、門内、扇の地紙、地神、地神北峰を経て玉川沿いの飯豊山荘へ下り五日目に山形県小国村長者原の部落へ着いたのであるが、下降路に選んだ飯豊山荘への丸森尾根の下りは、岳樺やブナの森林帯に入ってから瘦尾根であまつさえ急峻で気苦労が多く開口した。これは小生の体力の老化でそう感じたのかと考えられるが、概して他の東北の山ではかつて体験しなかった酷しさを味わったのである。

飯豊山は高山植物が豊富である

眺望は前二日間は上々、三国山からは遠くに那須、左へ安達太良、吾妻、蔵王、朝日と眺められたが、夕べとなった飯豊神社から本山の頂上では暗雲に閉ざれ、その後も夕立や曇天で眺望が不能であったことは実に残念であった。この山旅の中で、山都駅前のタクシー経営者夫妻、御沢、横峯、地蔵、三国、切谷の各小屋および飯豊山荘の人々が親切であったことは、余計に実のあるものにしてくれたのである。ただ改修を望みたいのは、かいらぎ小屋の雨水の浸透と門内小屋の雨漏りと排水である。またこれは難しいことであるが、御西岳北側雪渓の脇に幕営した際、ブヨに刺され参ったが何んとか駆除出来ないものか、何はともあれ飯豊山は登り甲斐のある素晴らしい山であった。

終りに小生如き老輩で体のバネが効かなくなった者が、これに登り得たのは友人松家君の賜ものと厚く感謝している次第である。  
ハ参考／山岳第廿年三号奥羽号、武田久吉氏、沼井鉄太郎氏飯豊山

紀行、藤島敏男氏著『山に忘れたパイプ』飯豊山。

## 山を歩く 日高幌尻岳 小 倉 厚

假松を切りひらいた登りにくい馬の背と呼ばれる急坂を登りつめると北カールの上にでた。そこは風がなく平和で美しいお花畑だった。ウサギギクの黄色が鮮かに浮び上がり、あたりの濃いガスまでも染めていくように見えた。ついには日高の盟主幌尻岳の頂上は目前だと思った。しかし、そのお花畑から岩稜へ、そして頂上までの道は意外に遠く、ガスの中につきつぎに小さなピークが現われた。

ガスと風は、われわれの行手をはばむかのように強まる一方だった。幌尻山荘からついてきた純白の野生の犬はわたしたちを頂上へ導くように先に進み、頼もしくも雄々しく風に立ちむかい時々岩上に立った。あたかも日高の精のごとくに……と、ブイラルベツ川からの合流点に達しほっとした瞬間、突然犬が唸声を上げた。一瞬ヒグマかと胆を冷やしたが近づいてよく見ると山のように荷を背負った屈強の単独行者だった。彼の方も驚愕した。昨夜七ツ沼に幕営

したという。ただ一人ほとんど人に会わずトツタベツ川をつめてきた彼にとっては、なつかしい人との出会いだったに違いない。われわれとよくしゃべった。

頂上はそこから一投足であった。視界はゼロ。この記念すべき感激の一瞬にもすさまじい強風と白い気体の乱舞のみがわれわれを迎えた。やや広い頂上にはただ三ヶ所と小さなケルンがあるだけの淋しいものだった。大衆への門戸が開かれたといっても、日高はまだこの程度の原始の姿をとどめている。寒気が襲い、われわれはウインドヤッケをつけ記念撮影をし、もってきた水ようかんをたべながら後続者を待ち続けた。額平川を自動車で三十数キロさかのぼり、さらに十一キロの林道を歩き、四キロの徒渉地帯を抜け

### 海外だより

## 小島鳥水氏の 足跡を尋ねて

近 藤 信 行

この夏はいかにお過ごしでしたでしょうか。サンフランシスコに到着早々に前便を差上げたまま、ひと月半ほどごぶさたしてしまい申し訳なく存じます。八月十三日付のお便りはロスアンゼルススのヨコ・マレン宅より回送されて、シアトルにて落掌、ありがとうござい

ました。異国にあって読むお便りは、また格別なものとおもいました。  
サンフランシスコに十二日、ロスアンゼルスに十一日、その後、八月十九日から九月八日までシアトルに滞在、そしてふたたびサンフランシスコにまいりもどって、取

て幌尻山荘へ、山荘からは三・八キロの山道を登りつめた二日間の長い苦しい行程の終りにふさわしい厳しさがそこにあった。  
ポロシリ(幌尻)はアイヌ語で「大いなる山」という。この偉大なる山は白いベールに包まれたままついにその全貌をわれわれの前にひとときも現わしてはくれなかったが、この厳しい山行をふり返ってその片鱗なりともふれ得たことに充分満足させられた。しかし假松の緑、そそり立つ峻峰、白いカール、悠々とこの大自然の中に遊ぶヒグマの親子——そんなイメージを抱きつづけてきた原始の世界、日高山脈を、現実にはガスの中を歩いたのみの私は、晴れた日再び訪れるまでは、このイメージを変えずに抱きつづけることだろう。(昭50・8・1、2、3)

材の最後の仕上げにとりかかっております。ロスおよびシアトルでも、東京銀行の方々の手まわしがよく、同封のような記事(羅府新報、北米報知)が出されて、短時間のうちに、当時の小島烏水を知る現存者に会うことができました。たとえばシアトルの田村頼助氏は、いま八十六歳の高齢の方ですが、「北米報知」の記事をみてわざわざダウン・タウンにある東銀支店まで出かけてきてくれました。

明治三十八年に渡米、山野放浪を好んだという氏は、狩猟のライセンスまで持っていたということですが、「氷河と万年雪の山」にもその名前が出てまいります。烏水氏のレーニア、フッド、ベーカーなどに同行した人です。当時、日本人としてはじめて自動車を持ったとのこと、同行というよりは、日本人一行を自分の車に乗せて案内したということでした。また写真係もこの方の役割で、当時の古ぼけた写真をみせてくれました。小生、レーニア登山から帰ってからふたたび田村氏と連絡をとり、疑問点をたしかめることができました。烏水氏一行がはたして最高点のコロンビア・クレストまで登ったかどうかということです。

これまで取材のためのインタビュにに応じて下さった方は、五十人を超えるかとおもいます。美術

関係、書物のことなども調べてみました。しかし「象をなでる」のたとえを使つては失礼ですが、烏水氏の全体像をとらえている方はいませんでした。その山と文学と美術と、そして歴史と科学と、さらに銀行員としての生活のぞくことは、当時の在米日本人には無縁だったのでしょう。正金銀行支店長は雲の上の存在だったと、古老人たちは口をそろえて言っていました。具体的な資料として、『新世界』『羅府新報』二紙を調査して得たことは、大きな収穫でした。ロスでは加州大学にリン氏(東洋関係の書誌学者)を訪ね、蒐集目録をみせてもらいました。といつても小生の求めているものはすくなく見つかりませんでした。が、「A Buried Past」という題名の言葉どおりに、日本人関係文書の多くは第二次大戦下の接収その他で失われてしまったようです。シアトルに現存するといっていた「大北日報」はついにみつかりませんでした。

ところで山の方は、ロス滞在中まずホイットニーに登りました。登山者の人数制限をしているので、あらかじめ許可をもとめねばなりません。途方にくれたましたが、日本からやってきたということで認めてくれました。阿岸明子さんの事務所で働くヒロシ君という若いカメラマンの車に乗せてもらって、沙漠をえんえんと七

時間も走り、ローン・ペインの谷から入って、ローン・ペイン湖のほとりに幕営、ミュー・トレイルにしたがったのですが、長い道のりをひとり登ってきました。東面の急峻な岩壁にくらべて、頂上はやや円みをおびた平坦なところ。避難小屋が建てられていました。アラスカを除いて、アメリカ本土の最高点(一四四九五フィート)だそうですが、あまりのあつけなさに少々がっかりしました。帰りはデス・バレーを周遊、アメリカのおそろべき自然の造形物を垣間



みたような気がしました。

シアトルに入ってからグリフィス・ウェイ氏の配慮で Mountainers Club の面々に紹介され、機会あるごとに山に出かけていました。まさにヨーコ・マレンから自動車運転ができないのはアメリカでは致命傷だなんてからかわれましたが、そのとおりで、小生は彼らの車にのせていってもらうほかにありませんでした。ウェイさんのお宅をはじめ、チャールス・クレンチャウ、エドワード・ボルトン(ともにアメリカ山岳会員)ら

の家に泊めてもらっていました。着いた早々にボルトン夫妻がウェイ氏宅に来てくれて、明日、チェア・ピークに出かけようという話になりました。シアトルから一時間ほどのスノカミーマスの手前の谷を入ったところの岩峰ですが、三人で北東壁バットレスを登って頂上に立ちました。すると北方にはベーカー、シャクソン(古谷久三氏の遭難した山)、そして東にかけてグレイシャー・ピーク、ステュアートなどの雄峰が雪を付けて美しくみえました。南方にはひととき大きなレーニアが氷壁と氷河をしたがえておりました。ああ、これがカスケードの山々か。カリフォルニアの沙漠をみあきた小生にとって、緑と水と雪の多いワシントン州の山々がありがたくなりました。

その翌日、ウェイ夫妻およびナチュラリストたちとオリンピック山群北部にハイキング、そこは高山植物の宝庫でした。九月のレーニアはマウンテンヤーズ・クラブの生徒たちをつれて、レーニアのサクセス・クリーバーを登るといいうので同行を約束していたのですが、レーニア登山の機会は意外に早くやってきました。MSR(Mountain Stry Research シアトルの有名な登山道具店)の社長ペンバシー氏が連れていってくれることになったのです。ウェイさん

には烏水の登った山、レーニア、ベーカー、フッドの三つはぜひとも登りたいと伝えておいたので、彼は親切にも車の便と同行者を探してくれていたのです。

当年六十八歳というペンバシーは巨体の持主、それにリュシシダはほっそりした美人、その二人と東面のエマズ氷河に入ってテントに三泊したわけですが、シュアマン・キャンプからはペンバシー氏とロープをつないで絶頂に登りました。さすがにみごとな山でした。

アラスカや南米などにかずかずの足跡をのこしているクレンチャウと一晚酒をのんだとき、彼は「Mt. Rainier is my heart」と叫んで、黒人系独特の大仰な身ぶりをみせましたが、いろんな登り方のできるおもしろい山だとおもいました。彼はこれまでにいろんな山を登ったけれど、一番好きな山だと書いていました。

八月三十日、レーニアから帰ると、ボルトンからウェイ事務所に電話があつて、明日、セント・ヘレンズに行こうと言ってきました。目的は北面のフォーサイス氷河とのこと。願ったりかなったりで、承諾しました。やさしいヒル夫人が食糧その他をととのえてくれて、夜、シアトルをたち、セント・ヘレンズの登山口の路上で仮泊。四時ごろから歩きはじめ、氷河にとりついたので、これは

氷瀑の連続でした。大きなクレバスが多いので、中腹から右手をまいて、最後は中央の雪壁を登りました。頂上のレジスター・ポックスはひろい雪原の南端にひそやかにおかれていました。

滞在日数ものこりすくなくなつて、さて、ベーカーはどうなるかと思案していましたが、遠いところなので、車の便はなかなかみつかりません。九月二日の夜、マウンテンヤーズ・クラブでアメリカ山岳会の会合があつて、ウェイさんから参会者に紹介され、小生は持参の『氷河と万年雪の山』を献呈しました。小生の山行希望について、この日、前会長のヘンリー・オット氏も相談のつてくれて、三連休にグレイシャー・ピークに行くバーンズ氏に電話ではかつてくれました。クラブの登山学校の山行とのこと。州の法律によって登山人数は一パーティ十二名以内と定められているようです。すでに定員に達しているようでしたが、特別に加えてもらうことになりました。こんなところはアメリカ人の自由闊達なところかもしれません。

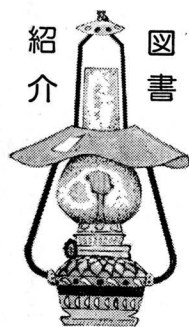
のデブでした。バーンズは三十四歳のエンジニアで、にこやかに話しかけてきます。おれのテントに入ってくれといってくれました。こんなことで三時間のドライブのあと、他の生徒たち(十五歳の高校生から四十五歳の高校教師まで)とおちあつて、長いトレイルを一日がかりで歩き、ヴィスタ氷河の見えるテント場まで登りました。カスケード山地に入ってから実によい天気だったので、翌日は残念なことに雨。そして強い風が吹いていました。午前七時、ロープの組わけをして登りはじめたのですが、十一時半、ケネディ・ピーク近くの岩峰の下で、バーンズを中心に登るか降るか協議をはじめました。「ノブ、君はどっちを選ぶか」というので、「登りたい」というと、あまり賛成はえられませんでした。氷河の上での民主主義的な討議(?)のはて、降りることにきまると、生徒たちはなにやら歓声をあげました。悪天候のため、頂上に達することはできませんでしたが、帰りのみちみち、バーンズと二人で歩いていると、彼はしきりに Sorry, Sorry と連発します。かえってこちらがわがままを言つて申し訳ないおもいがしました。

シエラに行っていました。クリンチ氏の紹介でビショップに住むブランチャードとマーセードにおちあつて出かけたのですが、カテドラル・ピークという名のとりの美しい岩の尖塔に登りました。長々と駄文を書きつらねてしまいましたが、シエラ・クラブのこと、自然保護のことなどにつきましては後便にて。

今晩からシャスタに出かけます。グレイハウンドで山麓まで行って、ルック氏に紹介してもらつた Mrs. Susan Heilmann という女性の車に途中まで乗せてもらうことになっています。シャスタは単独で登る予定です。(ルック氏はテントを貸してくれるといつて、わざわざホテルまで持ってきてくれました。)

こんなありさまにて、アメリカの山友達にはたいへん親切にしてもらつております。小生のわるい発音の英語でもきいてくれるので、ありがたいとおもいます。シャスタから帰ってから、クリンチ氏、ベディン氏からそれぞれ夕飯によばれていますが、あとのこりすくない滞在日数のなかで、取材の仕上げをしようとおもつております。二十七日に当地をたち、二十八日午後羽田着の予定です。皆様によりしくお伝え下さいますよう。

(九月十七日、サンフランシスコにて、島田巽氏宛)



### わが北壁の記

—星野隆男  
追悼集—

日本人として初めてマッターホルン、アイガー、グランド・ジョラス三大北壁の冬期登攀記録を持つ星野隆男氏の追悼集である。一般の追悼集によく見られるじめじめしたところがなく、一人のすぐれたクライマーの短かつた生涯を伝える記録集としてよくまとまられている。

三大北壁冬期登攀史を巻頭に、遠藤二郎、嶋村幸男、植村直己、小西政経、近藤等らの諸氏がそれぞれ思い出をのべており、また星野氏の生前発表された記事も再録してある。このすばらしいクライマーは三年前の十二月穂高の涸沢岳西尾根で雪庇とともにチビ谷に転落し、その生涯を閉じた。巻頭のグラビア写真もよく故人の面影を伝えている。

昭和五十一年六月一日、星野美津子発行、全アート七十三ペー

ジ、頒価八〇〇円、お茶の水若溪堂、または日本山岳会ルームで発売している。(山崎安治)

山・人・本  
特装本

島田 巽著

本書の紹介は本誌三七三号でなされているが、特装限定本百部が刊行されていることも是非書いておきたい。特装本は本文用紙に鳥ノ子紙を用い、表紙はヒラに表裏共ブロックドンの大著の銅版画を薄手の羽二重をかけて使い、背とコーネルにチョコレート色の牛革を用いているが、コーネルの革は稍小さ目で、全体のバランスがよく、ヒラの銅版画と相まって、極めて典雅な味わいを出している。背文字金押し、天金、見返しの色もすっきりとした感じを与える。少し大袈裟に言えば、近來のくらしい内容にマッチした、品格のある造本は珍らしい。若溪堂作の特装本中でも指折りのものである。著者の満足も想像にかたくない。アンカットであるため、木製のペーパーナイフを添えたのも親切だが、惜しむらくは刃の厚味が聊か厚すぎたように思う。

売価は一万七千円だが、既に売切れの由

(望月達夫)

## 霧の谷 II

増永迪男著

前著『霧の谷』が出たとき、私は本誌三六二号に紹介したが、その後一年余でIIが刊行された。前著同様越前の、あまり人の登らない山々、大日山等十二座をとり上

げて、前と同じようなタッチでえがいているが、今回はその他に山に逝ったひとへの鎮魂譜である「カケスの青い羽根」など三篇が収められている。

ここに、日本の山の好きは、案外あまり高くない山々にあることを、この書物は静かに語りかけている。

(望月達夫)

会員通信・集会報告

ネパール国王チベット訪問の  
映画を観る会

織内信彦



右から織内信彦氏、パント大使、西堀栄三郎氏  
シュレスタ書記官、シャルマ氏

今年の六月、ネパールのビレンドラ国王は中国の四川省とチベット自治区を訪問された。そして両地区で中国式の熱烈な歓迎を受けられたが、チベットへ外国の元首

が訪問されたのは歴史上はじめてのことだといわれている。このときの模様を撮影した三五ミリ映画が、ネパール大使館の厚意によってわれわれに観覧の機会を与えら

れた。

映画会は日本ネパール協会と共に催で九月二十二日さくらエックスレイの会議室を借りて開かれ、西堀栄三郎日本協会会長は開会にあたり「ネパール大使の厚意に敬意を表するとともに、日ネ両国の友好関係が益々深くなることを祈る」旨の挨拶をされた。たまたま同時刻に小坂外務大臣のレセプションに出席中で遅参されるパント大使に代わってシュレスタ一等書記官が挨拶のあと、映画は国王の搭乗されたローヤル・ネパール機がヒマラヤの雪の峰々を越えて中国領へ飛ぶところに始まり、ラッサの近代化された風景や、かつてダライラマが法王として君臨した宮殿などがスクリーン一杯に展開される頃には、会場を埋める来会者の興味と関心はいやが上にも高まっていた。

映画終了後会場を七階の本会クラブルームに移し、パント大使、シュレスタ書記官、アタッシュエのスペディ氏等を迎えての懇親会は、開宴にさきだち私から「外国の大使としてはじめて会のクラブルームへパント大使を迎えることができたのは、国王が外国元首としてはじめてチベットの地を踏まれたことと同様にわれわれにとつての記念すべき日である。また大使からたくさん英国のお酒をいただいたが、もしこれがネパール特産のロキシイやチャンであったら

更に山男たちを喜ばせたであろう」というようなことを、大使一行に対する歓迎の言葉として述べる記念品にクラブタイを贈呈した。パント大使は「国境を接するネパールと中国との関係、またネパールと日本、とくに日本山岳会や日ネ協会とは切っても切れないフレンドリーな関係にある」と、真摯な大使の御性格をそのままにいいいなスピーチを行われ、来会者に感銘を与えた。西堀さんの音頭で日ネ両国親善の乾杯のあと、和気あいあいのうちに秋の一夜を過ぎた。たまたま日本語勉強のため来日中のシエルパ、アン・ギャルツェン君も駆けつけ、大使と初

のあいさつを交わしていた光景は印象的だった。

この集会は前半は松田雄一氏、後半は関口周也氏の司会で進められ、大型プロジェクトの手配等については大塚博美氏他の方々の御協力をいただいた。当日の出席者は映画会一二〇人、懇親会六〇人であった。

## 錦秋の谷川岳

重いガラス戸を押し開けて表へ

## 売場ご案内

## 最新入荷の本

- ★ALPINE FORUM(ペルー・アンデス遠征1965年特集一早稲田大学岳友会会報2)2,000円
- ★怪峰ジャーナルからの報告1976(山岳同志会)1,250円
- ★霧の谷II(増永迪男)1,500円
- ★夕張日誌(松浦武四郎・沢丸山道子)680円
- ★砂漠の中の白い山(1971年福島県山岳連盟ヒマラヤ登山隊コ・イ・バンダカー登山記録)1,500円
- ★歴史と砂漠の国と山(1974年富山県山岳連盟シルクロード踏査隊)1,500円
- ★溪流(アラスカ遠征報告書一気象庁山岳部58)2,000円
- ★ヌプリ第2号~第6号(日本山岳会北海道支部)各200円
- ★野口雅光君谷川岳遭難報告書(あすなろ山岳会)1,250円

## 茗溪堂

＜山の本の売場＞お茶の水店三階  
営業時間平日・午前10時30分より午後8時  
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

出ると、清々しい朝の空気が寝不足の頬をなで、一辺に眠気をさましてくれる。十月二日夜十時過ぎの夜行に乗ったわれわれ日本山岳会の一行三十五名は、夜半二時過ぎに土合駅に降りるとそのまゝ西黒沢出合の警備隊詰所まで歩き、この土間で二時間程を仮眠して夜明けを待った。

今日は天神尾根パーティー(11名)、西黒尾根パーティー(7名)、マチガ沢パーティー(17名)に分れての集中登山である。五時半に起床がかりと、昼過ぎの頂上での再会を楽しみに、まずマチガ沢パーティーが出発し、巖剛新道を通って展望台まで登り、そこからザイルをフィックスして本谷へと下降した。心配された天候もすっかり持ちなおし、まさに拾いもの一日である。明るく開けた谷は白く輝き、周囲はすっかり紅葉して燃えるように色づいている。正に錦の絨毯を登っている感じである。S字状付近のナメ滝は冬の雪崩など思い出すことも出来ないようなおだやかな美しさを呈しており、乾いたスラブや階段状の岩を快適に登って、上へ上へと高度をかせぐ。総勢十七名のパーティーは、岩登りには多過ぎる人数だが、最年長の長沢光和氏(70歳)を始め、皆しっかりした足取りで楽しそうに登っている。その上少しでも悪いところがあると、集会委員のリーダー達はすぐ先行して

ザイル工作をしては安全をはかってくれるので何の心配もない。それに思ったより他のパーティーが少ないのもこの山行を楽しく感じさせる大きな要因であろう。時々西黒尾根を行く仲間からコールがかかる。見上げる左側の尾根の上に点々とそれらしい人影が見える。彼等もわれわれのピッチを見ながら行動しているようである。足元に咲き遅れのトリカブトが青紫の可憐な花をつけ、登攀に疲れた目を楽しませてくれる。核心部を過ぎ、いくつかの滝を快適に越してゆくと、最後に要の滝に出る。滝は大きいものではないがいやらしいところである。早速ザイルが張られ、一人ずつ、スタカットの登攀が始まる。何しろ十七名のメンバーが一人ずつ、スタカットで登るのは大変な時間がかかるが、しかしリーダー達は時間よりも安全を第一に考え、集合時間への遅れには目をつぶっているようである。

順番を待つ間に最年長の長沢氏が、「私はこの辺の尾根筋は全部一通り歩いてみました、そして一度は沢を登りたいと思っていたのですが、何分にも一人では登る訳に行かないので今回の計画には一番に申し込みました。本当に良かったと思います」と喜んでおられたのが印象的だった。JACの集いで岩登りを計画したのは珍しいことだが、それだけに会員にとっ

ては待ち望んでいたのかも知れない。それが参加メンバーの半数をマチガ沢パーティーに参加させ、一番人気が集まったゆえんで

あろう。

やっと全員に登り終えると、後は扇の要から草付きのガレ場を一気に稜線まで登りつめて、オキの

耳とトマの耳の鞍部にとび出した。稜線では西黒パーティーや天神パーティーの人たちが時々飛来するガスの中で辛抱よく待って

## 明治初期の日本における

### 外国人の登山活動について (二)

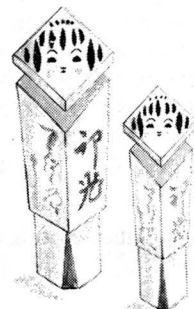
水野 勉

前号の(一)を書いてから、山書月報一六三号(日本山書の会発行)に谷有二氏が「幕末・外国人富士登山の歴史的背景(三)」という興味ある記事を發表したので、明治以前ではあるが、少し紹介しておきたい。

外国人による富士山の初登は一八六〇年のオーロコックによるものであるが、第二登はスウィス総領事ヴレンヴァルトら四人によって、一八六六年八月になされたということが、谷氏の調査で判明した。これは「富士宮市史」掲載の「池谷文書」という日本側文献と、シーベル・ヘグナー社(チューリッヒ)に保存されているヴレンヴァルトの日記によって明らかにされたのである。

このようにして、日本登山史のうち、外国人による登山活動が次第に明らかにされていくのはうれしい限りである。これから紹介しようとするE・クニッピングの山行もそういう意味からも極めて興味あるものである。

明治初期における日本の地図は、海岸線はすでに正確に測量されていたが、内部はまだ不完全であった。伊能忠敬の二十万分之一の地図も残念ながら未完成で終わっていた。そして大街道やそれに沿った山は記入されていたが、山岳部は全く不正確であった。クニッピングはそこで栃木、福島、新



潟、群馬の各県にまたがる山岳地帯を調べようと、一八七九年夏にまず日光へ向った。それから中禅寺湖から湯元を経て金精峠を越えた。鬼怒沼への道はとらず、穴沢、上小川を経て沼田街道へ出たのである。それから街道を北へさかのぼる。クニッピングは、カサシナガワ谷と呼んでいるが、これは笠科川谷である。しかし、戸倉を経て、三平峠を越えて尾瀬沼に入ったらしい。かれは尾瀬沼に入る手前の峠を、'Pass Toze'と呼んでいる。この峠を太平洋と日本海とに注ぐ川の分水界といっている。

「尾瀬沼周辺は避暑地としてつくられたようにみえ、数年のうちに、多くの人が訪れるようになり、数年前には魅力ある場所として訪れるようになることを確実に期待していいだろう。上野と岩代とのわずかなばかりの交通は、夏に限られており、荷馬によって行われ、冬には雪によって峠は閉ざされる。目下のところ、建物としてはわずかにみじめな小屋が湖畔に二軒あるきりである。しかし夜の泊りには十分間に合う。」クニッピングは尾瀬沼から松枝岐へ出て、そこで、あたいたか出迎えをうけ、豊富で、おいしい食事でありつた。ここから越後へ抜けるには、本道として、ずっと北寄りの八十里越えがあった

いてくれた。肩の小舎で小憩の後  
あとは錦秋の天神尾根をのんびり  
と周囲の紅葉を眺めながら、ある  
者は谷川温泉へ、ある者は水上へ  
と降って行った。  
(入沢郁夫)

## 山の スケッチ教室

「山での印象を思いのままにスケ  
ッチ出来たら……」こんな望みを  
かけての三回にわたるスケッチ教  
室に参加し、何とも楽しく内容あ  
るJACならではの小集会を味わ  
った。軽妙にかつスケッチ美術  
学の核心をもつ山里寿男先生の講  
義実習はまた制作意欲をかきた  
てる。スラスラ筆を動かしている  
諸先輩にまじってのデッサン、残  
念ながら基礎のない悲しさ、ただ  
画用紙をよごすのみであるが時間  
が過ぎるのも忘れる程の充実感を  
味わった。

何にもましての圧巻はスケッチ  
登山、前日からの長雨で足が鈍っ  
たせいか新宿に集まった総勢十数  
人、しかし一夜あけて小海線の始  
発が出る頃は富士のシルエットを  
くっきり浮べた朝空が広がって  
いた。車窓から赤岳稜線のモルゲン  
ロートに絶好のスケッチ日和と雀  
躍、しかも九月十六日、佐久広瀬  
駅に降り立ったのはわがJACパ

ーティのみ。一時間程のアプロ  
チ後の休憩にはザックを下す間も  
もどかしくスケッチブックを開き  
始める。

男山の北西から突き上げる沢を  
直登し山頂岩峰での三六〇度の壮  
大な展望を前にして、意識のみ空  
まわり、もどかしい絵筆をあこれ  
模索しているうちに時間切れ、  
それぞれ個性的な作品をザックに  
納め、四時十五分、発車時間に余  
裕をもたせてパッチリ駅ホーム  
に立つ。

さすが集會委員諸兄のコンテに  
は敬服する。何はともあれ山岳ス  
ケッチの初作をものにすることの  
出来たこの小集會、再々の計画を  
お願いしてお礼の言葉に代えるの  
は少々虫がよすぎるだろうか。  
(勝田)

## 武蔵野の夕べ にヨードルを 聞く集い

去年の秋から復会した「武蔵野  
の夕べにヨードルを聞く集い」は  
今年も去る九月十八日の土曜日午  
後六時ごろより、吉祥寺の今井嘉  
道氏庭園に於て催すことができ  
た。

すずろな初秋の風にひびく虫の  
声、チロルの夕べを思わすヨード  
ルの音律を聞きながらの、山仲間

が、クニッピンングは、越後境の最南部を通る最短  
のルートを選らんだ。村人もそのルートについて  
ははつきりとわかっていなかったらしかった。し  
かし、とうとう、かつて銀山への道を切り拓いた  
案内人をみつめて、銀山へと出発した。駒ヶ岳の  
南の峠を越え、四方のすばらしい景観を眺めた  
いうから、大津岐峠を越えたのであろう。越後側  
は雪が残っていた(七月二十日)。谷を下り、や  
がて銀山へ到着する。この頃はかつての鉾山とし  
て栄えた銀山ではなく、さびしい、忘れられた鉾  
山であった。かれは、その頃は鉛鉱を掘っていた  
人夫は一五〜三四人くらいだと書いている。

クニッピンングはここから北の又川をさかのぼ  
って、Michi-Togeを越えたとしているが、これは  
現在の枝折峠であらう。そこから越後駒ヶ岳へ  
のぼれると書いているから、まちがいに枝折峠  
であらう。越中の立山まで見えたという。それか  
ら、かれは小出に出るが、普通なら三国峠を越え  
る街道をたどるところであるが、かれは遠廻り  
いやだとして、近道である清水峠を越えをえらぶ  
のである。清水峠は一八七三年に改修されたので、  
クニッピンングは新しく切りひらかれた道といっ  
たのである。そして、六日町から清水を経て、清  
水峠を越え、湯桧曾川沿ひに下る。かれは右手に  
一の倉をみている。それから、沼田へと下ってい  
るのであるが、この日光から銀山を経て清水峠越  
えのルートは、一八七九年(明治十二年)という  
時期として珍しいものであろう。

クニッピンングのこの山行は、一八八二年になっ  
て、ドイツの地理学雑誌「Petersmann's Geogra-  
phische Mitteilungen 第二八巻」に報告されて  
いるけれども、この山行は英国系の「ハンドブッ  
ク・フォア・ジャパン」には全く参照されなかつ  
た。初版から第九版までこのルートについてはふ  
れることがなかった。このクニッピンングの山行

は、登頂ということからいえば、全く実績はなか  
ったけれども、そのルートの新しさについては、  
その当時としてみるべきものがあると思われる。  
それ以上におどろくのは、その報告に付いている  
地図である。二十五万分の一であるが、伊能図に  
よって緯度と経度を定め、たどったルート付近の  
部落、山、河川を表し、さらに、その高度をそれ  
ぞれに記入しているのである。標高は高度計のみ  
に頼ったから、現在のものとは少しずつ違ってい  
るが、地形はだいたい正しいといえる。尾瀬沼の  
東岸には小屋の所在まで記している。燧ヶ岳を一  
九八〇としたのは、少し低すぎたが、そのほかは  
一〇〇メートル前後の相違である。物見山、会津  
駒、朝日岳、荒沢岳、越後駒、八海山、一ノ倉  
岳、武尊山などの山々が記入されていて、奥日光  
の山々などは殆んど全部書きこまれている。

もっとも松枝峠は戊辰戦争の時に津藩兵が駐  
屯したし、尾瀬沼を越えて、戸倉では戦すらあつ  
たのだから、その地方の人びとには開かれたルー  
トであつたかもしれない。しかし、松枝峠から銀  
山平へのルートはその当時もみちらしいみちはな  
かつたようである。

一八八〇年前後は、外国人が日本の山岳地帯に  
さかんに入っていった時期である。ジョン・ミル  
ンは、一八七七年から七九年にかけて東北の山々  
に登っているし、ガウランドは一八七八年に槍ヶ  
岳、一八八〇年には立山、爺が岳、五郎岳などに  
登ったとされている。アトキンソンは一八七九年  
に八が岳、白山、立山などに登った。イギリス公  
使ハリー・スミス・パークスとアーネスト・サト  
ウは一八七八年に針ノ木峠から立山へ向った。日  
本の山々が外国人に知られたのは、この一八八〇  
年前後とみてよいであらう。ここに紹介したクニ  
ッピンングの山行も、そのような一連の動きの一つ  
として考えられるのである。

との懇親、パーティは、最高の雰囲気  
に浸ることができた。

当夜はカナダのオリンピック見  
物の折に写してこられたロッキ  
の山々のスライドを、中保氏が映  
写され、斎藤桂さんも日本の山の  
写真を見せて下さり、自己紹介の  
後、四月の現地集会丹沢山麓塩川  
温泉座談会のご出席が最後となっ  
た日高信六郎氏の録音を聞き、故  
人をしてのんで、九時半頃和気あ  
いまいのうちに会を終了した。今年  
は残念ながら十五夜の名月は見ら  
れなかったが、星月夜であった。

参加者  
今井雄二、今井喜美子、片岡博、  
錦織保清、沼倉寛次郎、森川洋佑、  
今井嘉道、今井直子、今井道雄、  
石田稔郎、中保、中川恵賢、斎  
藤桂、武田満子、尾崎春子、小原  
陽子、金子みどり、鈴木悦子、桜  
井洋子、坂倉登喜子、計二十名、  
順不同。(坂倉登喜子)

## 第16・17回登山 技術講習会

第16回登山技術講習会は久しぶ  
りに初冬の富士山においてチーフ  
リーダーとして山崎安治委員長の  
参加のもとに開催された。

初・中級者を対象として募集し  
た雪上技術講習会は、予定された

募集人員を大きく上まわり、38名  
の参加者があった。一方同時期に  
富士山等での雪上訓練合宿が集中  
するなど、優秀なコーチを集める  
のに苦労したが、それでもなんと  
か確保することが出来たのは幸い  
だった。

昭和50年11月22日午前9時40分  
に河口湖駅前に集合した参加者た  
ちは、手配したバスが前日の降雪  
のためどこまで入るのか心配だっ  
たが、お庭小屋下まで入ることが  
出来、ここから全員で荷を背負っ  
てお庭小屋に入った。午後からは  
五合五勾付近まで登り、夕方まで  
パーティ別に雪上訓練をし小屋に  
もどった。小屋は貸切りだが人員  
が多いためにパーティごとの献  
立、炊事であったことも手伝って  
コーチと受講生との交流が少なな  
ったのは残念であった。

2日目は風雨、雪まじりの良い  
天候ではなかったが、昨日と同じ  
場所雪上訓練をし、天候が回復  
しないため、上部に登ることをあ  
きらめ、午後早めにお庭小屋に引  
きあげた。

3日目は小屋で机上講習会及び  
反省を含めたミーティングをおこ  
ない、荷物をまとめ小屋を掃除し  
たのち午前10時、むかえにきたバ  
スに乗り込み、河口湖駅前で無事  
解散した。

第17回登山技術講習会は、本会  
として初めて上高地山研を根拠地

として利用、徳高岳沢にて残雪期  
の雪上技術修得を目的として昭和  
51年5月22日(土)・24日(月)  
開催された。

全員午前9時、山研前に集合、  
夜行の疲れをいやす間もなくここ  
に荷物を一部預け、金坂一郎チー  
フリーダー以下総勢26名、岳沢に  
向った。前日の悪天とはうってか  
わり、汗をふきふき約2時間半で  
全員岳沢ヒュッテ下の河原に到  
着。早速テント設置、昼食後、明

## 『山岳』第七十号目次

### 創立七十周年記念特集

私における登山の変遷 今西錦司  
山への回想(講演) 横 有恒  
高所肺水腫について(講演) 中島道郎

創立七十年に寄せて 日高信六郎  
いくつかの回想 辻 莊一  
ノットファグスを訪ねて 田中 薫  
日本山岳会との五十年 吉沢 一郎  
△座談会△  
日本山岳会の戦後三十年 望月達夫・浜野正男  
折井健一・金坂 一郎  
山崎安治・松田雄一  
上高地山岳研究所改築報告 山崎安治  
二つの記念行事―「近代登山の先駆  
者たち」展と「覆刻日本の山岳名  
著」の刊行 近藤信行

ヒマラヤン・ノット75年 片山全平  
△追憶△  
三枝守博(成瀬岩雄) 中原繁之介

神岳側の雪渓に登り、グループ別  
に雪上訓練をおこないテント場に  
帰着、明日の行動を期待し早めに  
消灯。

2日目、夜半より前日の好天と  
うって変り雨、朝食をとりテント  
内で待機。しかしいつか雨はや  
まず、協議の未撤収をきめ、上高  
地に向け下山した。午後からは山  
研にて金坂氏、浜口クターを中  
心に全員机上講習会、そのあと庭  
に出てアイゼン着脱やザイルさば

### エレスト登頂(一九七五)

久野英子・田部井淳子  
ダウラギリV峰初登頂 武田昌策  
ダウラギリIV峰の登頂とアクシデン  
ト 野村哲也・西前四郎  
K12峰の登頂と遭難 岩坪五郎  
チュールン・ヒマール西稜 中島信一  
カンジロバ・ヒマール紀行 河村栄三  
空にたどよう峰 松永敏郎  
山岳航空写真見覚え書 山田圭一  
郷土富士考 新井 清  
「栗駒山紀行」とその解題 柴崎 徹

△図書紹介△  
松方三郎「山で会った人」その他  
(中島寛)「今西錦司全集」(水野  
勉)「高所登山研究」(小原和晴)  
「覆刻日本の山岳名著解題」(坂戸  
勝巳)岡茂雄「炉辺山話」(近藤信行)  
「Nothing Venture, Nothing  
Win」(島田巽)

△追憶△  
三枝守博(成瀬岩雄) 中原繁之介

きの講習をみっちりおこない、全  
員山研で懇親会、山の話に花が咲  
いた。

翌日は前日とうってかわって晴  
天。朝食をすませ解散、天気がよ  
いため徳本峠を越す人々、明神方  
面に行く人、思い思いに山研にわ  
かれを告げていった。

なお最後に協力いただきました  
た地元信濃支部に対してこの場を  
借りてお礼を申し上げます。

### 『山岳』刊行遅延のお詫び

『山岳』第七十号記念号の内容は  
前記のとおりですが、さまざまな事  
情から刊行がおくれてしまいました  
。編集スタッフの海外取材旅行、  
原稿入手のおくれ、その他いろいろ  
な悪条件がかさなって、年次晩餐会  
になんとかまにあわせようという努  
力もむなしく、十一月十七日現在、  
まだ校了になっておりません。玉稿  
をおよそくたさった方々はじめ、会  
員諸氏にふかお詫びいたします。

山岳編集委員会 近藤信行

# 最新刊 **ブルーガイド海外版** ②④

## ネパール・パキスタン ヒマラヤ・トレッキング

ネパール・ヒマラヤとカラコルムの高峰を巡るトレッキング・ガイドの決定版!! 世界の岳人の憧れエヴェレスト、アンナプルナ、K2など12のコースガイドとカトマンズや山の村、トレッキングの方法などを徹底ガイド／薬師義美・内田良平・広島三朗・芳野満彦・八千草薫ほか著……定価1380円

大好評  
既刊!

ブルーガイド海外版 ①⑥

## ヨーロッパ・アルプス

ハイキング、登山コースにスキー場を紹介。わが国最初のアルプス案内……定価680円

近藤 等／薬師洋行著



新版 山を考える

本多勝一 四六判／980円

きたぐにの動物たち

本多勝一 A5変型判／980円

山のパンセ

串田孫一 A5変型判／1500円

若き日の山

串田孫一 A5変型判／1500円

心の歌う山

串田孫一 A5変型判／1800円

上高地の大将

木村 殖 B6判／980円

谷川岳ヒゲの大将

高波吾策 B6判／980円

剣岳の大将 文蔵

佐伯文蔵 B6判／980円

山菜記《正・続》

片岡 博 B6判／正880円・続620円

はるかな尾瀬

朝日新聞前橋支局編 B5変型判／1500円

炉辺山話

岡 茂雄 四六判上製／1300円

実業之日本社

東京銀座1-3

振替東京1-326

●お知らせ

各支部

自然保護委員

前号でお知らせした自然保護委員は、あらたに各支部から推薦いただきましたので前号で紹介した分も含めてお知らせします。

北海道 辻井達一

岩手 湯浅俊行、近藤有慶、高橋亨夫

秋田 福田文二、庄司国千代

山形 後藤幹次

宮城 庄司駒男

福島 武藤清次

越後 猪俣信市、藤田英治、鈴木義男

信濃 井口謙司、浅輪幸久、中野和郎

静岡 坂下心一

東海 尾上昇、中世古隆司

岐阜 大内幸雄

富山 若林啓之助、石坂久忠、野島福三郎、浜田文二

石川 亀田与三、力丸茂穂

関西 出口一良、松長晴利、西本栄一、斧田一陽、三上博民、吉村節子

山陰 小椋凱夫、小西毅

福岡 稲永篤、脇坂順一

東九州 梅本秀徳

熊本 工藤文昭、馬場猛、本田誠也、佐藤光俊

本部委託 山村正光、田村聡明

計四十二名

忘年会

日時 十二月十七日(金)十八時  
場所 日本山岳会ルーム  
会費 一〇〇〇円

早いものでもう師走の声をきく候になりました。またいろいろ趣向をこらしたのしい一時を共にもちたいと思います。例年のプレゼント交換と、昨年始めて試みた即席のバザーを今年も開こうと思ひます。詳細は別途お知らせいたしますが、みなさまの協力をお願いいたします。

主催 集会委員会、婦人懇談会

会務報告

9月理事会

(9月3日午後6時本会ルーム)

▽出席者 今西会長、望月副会長、

浜野、高遠、小倉、神崎、大森、

皆川、原、大倉、黒石、田村俊、

橋本、浅田各理事、小原、浜野、

宮下各評議員 委任 織内副会

長、山本健、近藤、山本良、浜

口各理事、折井評議員

▽議案

・ナイロン・ロープの件(皆川)

52年度版「山日記」に登山用具

の安全と31年度版の記事につい

ても若干ふれる文章を編集委員

会名で掲載する(案)について

小委員会検討し、理事会に報告する

・亜細亜大学カラコルム学術登山隊推薦状交付願について (石川 佑)

・UIAA大会派遣者の件 (浜野)

出席予定の織内副会長が都合がつかず行けなくなったので、代りの人選、委員会に一任

・ルーム購入の件 (橋本)

具体的に検討する

▽報告事項

・日印合同女子登山隊帰国報告とあいさつ (須田紀子)

・学生部ガルワルヒマラヤ登山隊出発 (浅田)

・パミール国際キャンプ参加帰国報告 (原)

・ナンダ・デヴィ登山隊帰国報告 (梶 正彦)

9月2日朝日講堂で報告会を実施

・集会 (神崎)

10月にジャスノ登山(山岳同志会)の報告会を予定

・海外連絡 (田村俊)

ドイツ山岳会より交換登山の申し入れがあった

・マッキンレー山のゴミの問題についてアメリカ山岳会宛に返事を出した(日本国内の新聞・雑誌・山岳団体へ連絡した旨)

・婦人 (黒石)

ビールパーティー盛会、9月20日に日印女子登山隊報告会

・指導 (大倉)

11月20-23日富士山で雪上技術講習会を予定

会務報告

10月理事会

(10月8日午後6時本会ルーム)

▽出席者 今西会長、織内、望月各副会長、浜野、高遠、山本健、近藤、山本良、神崎、黒石、田村俊、橋本、浅田各理事、浜野、折井各評議員 委任 小倉、大倉、浜口各理事、太田監事、宮下評議員

▽議案

・愛知学院大学カラコルム学術遠征隊推薦状交付願について (湯浅道男)

・自前ルーム購入の件 (橋本)

候補について調査中、ルーム購入のためには会員よりの募金が必要

・製品安全協会の安全基準調査研究委員会(登山用具)委員として金坂一郎氏を推薦 (浜野)

・UIAA総会出席の件(浜野)

代表として決っていた織内副会長の都合がつかず、佐藤評議員が代りに出席

▽報告事項 了承

・集会 (神崎)

予定通り各集会開催し、参加者も多数

10月20日 会員懇談会

10月26日 ローツェ報告会

・遭難対策 (橋本)

短波放送の朝の気象通報再開について陳情

・自然保護 (山本良)

10月30-31日 上高地集会

・図書 (山本良)

10月23日 図書交換会

・指導 (橋本)

10月21日-23日 富士山雪氷講習会

・山研 (折井)

11月7日 上高地山研閉所

ルーム日誌

(51年9月)

3日(金) 理事会

6日(月) 集會委員、山研委員会

7日(火) 会報委員会

8日(水) 図書委員会

9日(木) 第三三七回小集会「ス

ケッチ教室」

13日(月) 集會委員会、青年懇談

会

14日(火) 学生部委員会

16日(木) 第三三八回小集会「ス

ケッチ教室」

17日(金) 雪崩研究会

20日(月) 第三三九回小集会「ア

ビガミン報告会」

21日(火) 学生部委員会  
22日(水) ネパール大使と映画の  
つどい

27日(月) 集会委員会  
28日(火) 青年懇談会、山日記編  
集委員会

29日(水) スケッチ批評会  
30日(木) 海外連絡委員会

今月の来室者四七三名

# 会員異動(51・9)

## 物故者

六三四二 広沢伝一(51・8・23)

七一〇 藤島敏男(51・9・9)

## 支部変更

六七六八 鹿野勝彦 東海支部

七八七一 渡辺義一郎 越後支部

## 改名

五八三五 南雲利彦

一五四五 静岡大学山岳部

## 除籍取消

三三三〇 県立福島商業高校山岳  
部

\*

\*

\*

昭和五十一年十一月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一  
利根川商事㈱さくらビル

発行所 法人 日本山岳会

発行者 今西 錦司

編集代表 大森 久雄

(813)二八六(代表)

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号  
印刷所 株式会社 技報堂

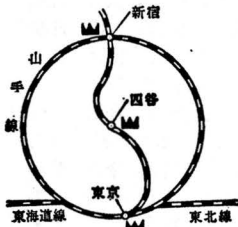
登山・スキー用具専門店

●買い易い  
山の店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101

TEL. 06(362)5736

●北へ来たら  
山の店●フレッシュな  
山の店

四谷店 東京都新宿区三栄町三番地

TEL (351) 7432・1912

八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五

TEL (271) 1560・8575

新宿店 新宿ステーションビル四階

サービスショップ

TEL (352) 6564

日本信販加盟店



山友社 たかはこ

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番

かたるペンティ  
でんや 281-8456  
中央区・八重洲4丁目

香山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1

PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京店・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031  
 東京店・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店  
 大阪店・北区曽根崎上三丁目47 (364) 0933 (代)  
 福岡店・須崎町1-4 (28) 3440



山の新聞

わたしの

草と木の絵本

坂本直行 B変型判一四〇頁 定価一三〇〇円

この本は今年九月で二百号を迎えた児童詩誌「サイロ」の表紙絵の中から、山の草・野の草18点、山の木・野の木12点、高山の草20点、高山の木8点を選びまとめたもの。絵も文も自然をみつめる著者の澄んだ眼差しが心地よい。

山日記 一九七七年版

日本山岳会編 A六ボケット判 定価九五〇円  
七七年版が発行されました。山好き同志の贈物として是非ご利用下さい。プレゼントカード付グリンデルヴァルト  
の山案内人

サミュエル・ブラーヴァン 井手貴夫訳

A変型判アート一〇〇頁 定価三八〇〇円  
横有恒氏のアイガー・ミッテルレギ・山稜初登攀に参加した著者ブラーヴァンが、日本の近代的登山と深い関わりのあるグリンデルヴァルトのガイドや、案内人組合の歴史、組織等を語る

エーデルワイスの詩 うた

坂倉登喜子 A5判三四五頁 定価二四〇〇円  
エーデルワイスをこよなく愛する著者は日本のエーデルワイス——ウスユキソウを北の礼文島から南の永田岳まで日本列島の山々に訪れ、さらにエーデルワイスのふるさとヒマラヤ四千メートルのランタン谷に感激的な対面をするなど、豊富な山歩きを通して綴る山と花の紀行集。

茗溪堂

●出版目録送呈  
●お買上、ご注文は最寄り書店でどうぞ!

〒101 東京都千代田区神田駿河台2の1 電話03-291-9442 振替東京8-24723